

地域支援心理研究センター公開シンポジウム（第5回）

基調講演「発達障害児への心理臨床的アプローチ」

講師：学習院大学文学部
伊藤 良子

【伊藤】学習院大学の伊藤でございます。落合先生から過分のご紹介をいただきましてありがとうございます。本日はここにお招きいただき皆様方と発達障害について学ばせていただく機会を与えられまして本当に感謝でございます。

本日与えられましたテーマは「発達障害児への心理臨床的アプローチ」ということでございます。レジュメをお配りいただいていると思います。レジュメに沿ってお話しさせていただきます。

一つは、発達障害というものをどのように捉えるか。もう一つは、そういう子どもたちとどう関わっていくのがいいか。また、その関わり—私たちは、プレイセラピーを行いますが—で何が起ってくるのか、お話しさせていただきます。と思っています。

今日、「発達障害」という言葉が、広く使われるようになってきています。そのことで、「自分は今まで苦しんできたけれど、そのことをこういうふうに理解してもらった」とホッとされる方、また「うちの子どもとは何か関係がとりにくいんだけど、それはこういうことだったのか」「考える手がかりを与えられた」と話される親御さんたちもおられます。

そういうプラス面もございますが、一方で混乱も生じているようです。発達障害の子どもを早く発見しないといけないということで、学校の先生方もご苦労なさっているのではないのでしょうか。そこで、私の発達障害につい

ての捉え方、心理療法では、何が起ってくるのか、できるだけ具体的にお話しさせていただきます。

子どもの心理療法は遊びを通して、プレイセラピーということで行われます。自閉の状態も重く、知的な障害も重い子どもたちは、就学前の場合、言葉も話すことが出来ません。そういう子どもたちに対しては、遊びによる表現、遊戯療法が主になってまいります。私は、子どもたちにとって遊びは生きることそのものだ、と考えております。子どもたちの遊びの中から、そう感じるようになってまいったのでございますが、遊戯療法の場では、生や死、仏教では生死（しょうじ）というような表現がなされますが、そういう生死（しょうじ）に関わる遊びが生まれてまいります。人間の根底には、このような生死（しょうじ）に関わる原初的な不安があるということが、子どもたちの遊びを通して感じることができます。

今日、若者たちによる様々な悲しい事件が次々と起こっております。それは、今申しましたような原初的な不安が、直接的に外の世界で、行動によって表現されてしまった状況であります。とても悲しいことです。そうした直接的な形をとらずに、象徴的に表現できるということが、ものすごく大事です。象徴的に表現していくことによって、行動にしないで済むということでございます。

そのような原初的な不安を象徴的に表現していくためには、他者が非常に重要な役割を

果たします。他者によって共に共有されるということが、とても大事になってきます。しかし、今日、そういう他者がいない、あるいは他者との関係がとても希薄になって、一人で抱えきれなくて、それを行動に現してしまわざるをえない、という状況になっています。このような他者との繋がりが、とりわけ困難なのが、発達障害の子どもたちであります。

発達障害という概念について、少しご一緒に考えたいと思います。発達障害の中核ともいえます自閉症については、ウイングという、自閉症研究をしてきた方が、自閉症スペクトラムという考え方を提示しました。自閉症には、スペクトラムのようにいろんな段階があるという考えです。自閉症領域の子どもたちを連続体として捉えるという考え方です。私もウイングと同じ頃から自閉症の子どもたちと遊戯療法の場で出会ってまいりました。そしてその保護者の方たちとも面接をしてまいりまして、ウイングと同じように様々な状態があって、連続体になっていると感じておりました。しかし、さらに言いますと、重症の自閉症の子どもから環境要因が強く作用している場合まで、様々な水準がある。自閉症の範疇だけではなく、あるいはその周辺群だけではなくて、環境要因、心理的な要因で、たとえば言葉が出ない、人と関係がもてないという状態になっている子どもたちまで、いろんな状態があるということを、たくさんの親子との出会いから考えています。

たとえば、こういうお母さんがおられました。お姑さんから、赤ん坊は泣いても抱いちゃいけないと。この頃の子は忍耐力がないから、赤ちゃんのときから忍耐力をつけるようにしないといけないので、泣いたからといってすぐ抱いてはいけないと言われた。それで子どもを2階に置いて、泣いても泣いても、お母さんは我慢して抱かずに放っておいた。一生懸命良い子に育てよう、お姑さんの

言うことを聞いて育てようと思われて、そういうふうにされたのですね。そうしたら子どもは言葉が出なくなってしまった、ということで相談にみえた。このように、環境要因が大きい場合もございます。その場合、プレイセラピーをしますと、早い時期に子ども達との関係がとれるようになって、言葉もすぐに生まれてくるということが起こってまいります。

こうしたことから、生物学的な要因のある方から、通常の発達のベースをもってる人たちまで、連続体として捉えることができると言えます。環境要因で一番大きなのは人的環境です。その子どもを産んだご両親でなくてもいいわけですが、周囲の他者としての人間との関係という環境がとても大事になってくるということ、一つ一つの事例から感じてまいりました。では、大人はどうなのか。私は子どもたちだけではなく、大人の方たち、青年期以降の方たちとの心理療法も長年やってまいりましたが、とても重い重症の神経症など、本当につらい症状、強固な症状をもっている方などにも、長年にわたって心理療法のお会いしてまいりました。長くお会いしておりますと、そういう状態がだんだん消えてまいります。それとともに、その人の根底に横たわっている強い不安感が見えてきました。不安をもちながら必死に生きようとして生じてきたのが、様々な症状なんですね。その方の症状がとれてきますと、今度は家族の方の状態がみえてくる。ご両親や、お祖父さんお祖母さんにもそういう状態があったんだということが、ご本人に、「自分だけじゃなくて親も、お祖父さんお祖母さんもこういう状態だったんだ」と見えてきたりします。すなわち人間の根底に横たわっている不安、そして、不安に対応するために各人に与えられている能力はそれぞれ違うのであって、それをみんな必死で抱えて生きているんだ、ということでもあります。こういう状態に

なる方は、感受性の鋭い方ですから、こういう状態が消えていくと、それをまた別の方向、創造的な方向に使っていくことができになる。ですから、人間存在そのもののあり方というのは、非常に多様であって、先ほど申しましたように自閉症スペクトラムではなく、もっと広く、発達のスペクトラムというのがいろいろある。それを丁寧に理解していくことが、人間理解には必要なのだ、と考えてまいりました。こういう観点から、私は「人間みな発達障害」といったほうがよいと考えております。

すなわち、完全な発達なんかありえないんですね。神の似姿に人間は創られたというのがキリスト教の考え方としてありますけれども、ダーウィンは勇気をもって、それに対して、そうではないんだということを言いました。人間は神の似姿として、完全な姿としてつくられたのではなくて、系統発生的に、気の遠くなるような何億何十億、そういう年月を経て、過酷な地球環境の様々な変化を生き残っていったのが、今日の我々です。「発達障害」というあり方が今も継承されているということは、そういうあり方の人たちがいなかったら、我々人間は今日まで生きていなかったということです。

とっても不安の強い人は敏感で、昔々、ライオンか恐竜が来たときに、「逃げよう」とみんなに言ってくれたかもわかりません。鈍感な人は、そんなこと知らずにボーッとしてる。それを救ってくれたのは、不安の強く敏感な人だったと言ってよいでしょう。あるいはこだわりの強い人が、生きる為に必要ないろんなことを見つけ出してくれたのかもわかりません。そうして人間は、全体として生き残っていった。もしそうでなかったら、今日そういう気質はなくなってしまっているはずです。また今後も、我々は変化していく。それは、環境との相互作用によって、生きやすいあり方が生き残っていく。どういう人間が

今後生き残っていくか、どういう人間に私たちは将来の人類を託すか、それは、今の私たちのあり方にかかっていると思います。ですから、どう変化していくかというのは、今後に向けて、今の時代を生きる人間の責任であります。

少し前までは、遺伝子は変わらないものだ、と教えられていました。そうではなくて、様々な可能性が秘められていることが、近年の研究で明らかになっております。動物と私たち、遺伝子の種類はそんなに変わらないんですね。ほんとにチンパンジーとそんなに変わらない。人間の間でも個人差が少しありますが、チンパンジーとそれほど変わらないのに、人間は、言葉をもつのはどういうことか。それは、先ほど申しましたような環境との相互作用の中で、人間は言葉を発する遺伝子を発現させていったということであります。遺伝子はとっても感受性豊かであって、その調整機能はとっても複雑です。遺伝子の多くのは、まだ発現していないので、今後、人間がこれからどう変わっていくのかも、環境との相互作用によるということになります。ですから、一人一人みんな違う。一人一人それぞれ固有のあり方で存在しているのであって、個々のあり方の多様性こそが全体としての人類の発展に寄与してきた、と言えるのではないのでしょうか。その中でも、一つのものにひたすらこだわるあり方が、先ほど申しましたように、我々の祖先の生命を維持してきた。そして、科学や文化を発展させることに寄与してきたのです。

先ほど申しましたダーウィンも、非常にこだわりの強い人で、小さいときから、石などいろんなものを集めてくる子であったようです。ダーウィンの進化論の構想は、彼が大学をでた後、就職もしないで、イギリスの海軍の船に乗って世界を廻って、そして、それぞれのところから動物や植物などを集めてきて、それを詳細に研究した。20年ぐらい研

究したというから、このこだわりもすごいものです。その間働いてないですから、家族の人に支えられたんですね。奥様などが支えられた。そして「種の起源」の本の抄録が出された。彼の奥さんが、婚約時代におばさんにダーウィンについて手紙を書いているのですが、それによると、「彼はとても率直で隠し立ての無い人です」「本当のことしか口にできない人です」と、婚約中ですから、すごく愛情をもって表現されています。まさに隠し立てができない、二重性がない、嘘がつけない、本当のことしか言えないというのは、発達障害的な側面ですね。

もっと古く、レオナルド・ダ・ヴィンチもなかなかの人でして、彼は人体の解剖図を120枚も描いています。詳細に描いている。しっかり見て描く。彼は絵画論を残していますが、彼の絵画論には「絵画は自然よりも素晴らしい」と。自然は時々刻々変わっていく、だけど絵画は、その一瞬の調整された本当に見事な調和をピシッと表現している。それが絵画だと。彼の絵画はそういうことなんでしょう。だから私たちの心をうつんだと思います。ここっていうところを、全く見事にそのまんま調和のとれた形で、描いているのが、彼の絵画です。この彼のこだわりのすごさにも驚きを禁じませんが、天才と言われる人はそういう人だと思います。

もう一つ、日本人について申しますと、聖徳太子は10人の訴えを同時に聴く、と言われてます。そんなことがあるのかなあとありますが、ADHDというのはそういうことなんでしょうね。いろんなことを同時にできる、しようとしている、聞こえてくるということです。聖徳太子はそれを聴いて、やれた人です。なかなかこれは難しいですが、今日のADHDの方でも、ものすごく能力のある方がおられることが、アメリカなどで報告されています。その人たちが聖徳太子の時代に生きていたならば、彼の横に並ぶぐらいの人に

なっておられたかもわからないと思います。

今の世の中は、なかなかそういうことを許してくれない。今日の間も、しかし、誕生直後はこういう能力を持っているんですね。ところが、その鋭敏さは、この世に誕生するやいなや、瞬く内に狭められていく。このような多様なあり方を、そぎ落とす形で発展したのが現代社会であります。社会の様々なシステムが整備されていった。それにともなって、それに収まらないあり方っていうのが出てくるのは、当然の成り行きではないでしょうか。その結果生まれてきたのが、「発達障害」という概念であった、と私は考えております。

同時にそれは、時代の精神を打ち破るような、ダーウィンという方もそうですが、いろいろの天才といわれてる人たちを調べてみますと、時代の精神を打ち破るような考えを提示しておりますが、そういう天才を生む土壌を喪失しかねない可能性をもっていると言わざるを得ないのではないのでしょうか。同時にですね、先に述べたような天才たちの周りには、彼らを支える家族やあるいは弟子たち、共同社会がありました。ダ・ヴィンチも、彼は独身でしたけれども、弟子が彼の作品を丁寧に整理して、後世に残したわけです。ダーウィンの家族が彼を支えたということは、先ほど申した通りでございます。

野球選手のイチローさんも、こだわりが強いのは、皆さんもご存知じゃないですか。彼は小さいときは偏食だったんですね。お母さんは、偏食を治そうとして、いろんな物を食べさせようとされたようです。が、お父さんは、彼は小さいときからヒョロヒョロだったが、3歳から野球をやりたいと言ったそうので、ヒョロヒョロではいけないから好きなものを食べさせた。ですので、彼は今でも好きな物だけ食べる。毎朝カレーを食べて、奥様がそのカレーを作られているのは、テレビで報道されています。イチローのお父さんのお

話がある研究会で聴かせてもらったことがあるんですが、本当に熱心に彼を支えて来られたことが良くわかりました。彼は小さいとき、このお店のこのお菓子が欲しいんだと言うんですね、そこにたまたまそのお菓子がなくて、「別のお店に行こう」とお父さんが言っても「ここのお菓子がいいんだ」と言って、地面に寝ころんで頑として動かなかったそうです。

これは、発達障害の研究会に、名古屋市大の西野先生という脳科学の先生が、イチロー君のお父さんと呼んできてくださりまして、直接お話を聴かせてもらって知ったことです。

その時、私はお父さんに、「3歳のときから好きだったとのことですが、どうしてイチローさんはそんなに野球が好きになられたんでしょう」と訊きました。そしたらお父さんは、その問いがわからないようで、どうして野球が上手になったかということは、丁寧に説明してくださるんですけども、なぜ彼が好きになったかということは、話していただけないんですね。そういう発想は無いようでした。私は、お父さんも野球が好きだと聞いてましたから、お父さんが好きだった野球を彼も好きになって、お父さんを鏡として彼はやりだしたんだなあと思ってたんですけども、お父さんは、彼と一体になっておられるんでしょうね。彼がなぜ野球を好きになったかという問いすら、お父さんにはなかったようでした。イチローさんも家族に支えられて、まさに天才として野球人生を生きておられる。能力も、学力もすごく高くて、どっちに進むかを考えられて、結局、野球の方を選ばれたということでした。

ところが、今日の社会では、彼らに見られるその裏表の無い、一途な、一つのことにこだわるあり方っていうのは、むしろいじめの対象にすらなっています。こうした「発達障害」のような状態を、治療の対象として考え出したのは、カナーです。カナーは1943年に

11例の子どもたちについて報告しまして、翌年にそれを「早期幼児自閉症」と名付けました。その子どもたちの特徴を、2つ挙げておられます。1つは同一態維持の欲求、同じ状態をずっと保つ、保ちたいという欲求が強いということ。もう1つは、極端な孤立。自分の中に閉じこもって人との関係を持たないということ、この2つです。この2つの特徴は、今のDSMなどの診断基準にも重なってくるものであります。

彼は、この11例の中の子どもの状態を書いています。その中のドナルドという子どもについて、こういうことを書いています。ドナルドは、ビーズやブロックを様々な系列に分けて並べて、配置して置き、並べる行為が終わると、いつもキーキー声をあげて飛びねへて喜んだ、と。これらの子どもたちは、それを並べて置くんですが、並べて置くだけじゃなくて、必ず見ているということです。私は、これを「見る遊び」と名付けているんですが、並べるという同一態をずっと守るというだけじゃなくて、それを見ている、見ること、見る遊びへのこだわりということこそ、このカナーが提示しました2つの特徴に収斂して現れているものだといえます。と申しますのは、それに固執していると、他者との関係がなくなる、ということが生じてまいります。1つのことにこだわると、他と関係をもつことができない。特に、人間と関係をもつことができなくて、極端な孤立に陥っていく。それが、この子どもたちの見る遊びに見られる状態であろうと思いますが、この見る遊びとは、むしろ、他者との関係性を確立しない、あるいは親に依存しない、たった一人孤立無援の存在として生きている彼らの懸命の生き様であると言った方が良いと思います。一人で生きるためには、この世界を自分の目で確認し、確かめ生きていかないといけないですから、それが彼らの生き様なのであると思います。ですから、彼らは迷子になることはありません

ん。自分で、道はしっかりと覚えて、自分の家に帰ることだができます。この彼ら、孤立して必死で一人で生きている彼らと繋がる方法が、この見る遊びの中にこそある、と私は考えておりますが、そのことについて次に説明します。

このような子どもが作りだす遊びには、3つの段階があると考えています。その第一は、今言いましたように、見る遊びにこだわっている状態です。カナーの早期幼児自閉症の状態とアスペルガーのいう自閉性精神病患者の子どもの微妙な違いを、少しご説明しようと思います。この見る遊びは、どういふふうに見えてくるかということです。

カナーの方のいわゆる自閉症の中核群の子どもの場合です。例えば、年齢が6歳になって就学直前になっていたのですが、まだコミュニケーションのための言葉がなくて相談にやってきました。彼は宙に手を振り回しながら走り回っている。奇妙な格好をして走り回っているという子だったんですね。それが何かわからない状態でした。しかし、お会いしていると、彼は黒板にそれを描きだしました。その描かれたものは、テレビの画面の正確な描写でした。まだ言葉は会話にならない子でしたが、漢字も、筆順はめちゃくちゃですが、漢字もそこに書かれ、テレビの画面がそこに写しだされたんですね。彼は、それを宙に描きながら走り回っていたんだな、ということがそのときわかりました。彼は、テレビを一日中見えています。テレビ番組欄の新聞を、ずっと大事に持っています。ですから、そのテレビ番組欄の時間を見るようになったんですね。テレビ番組とテレビ番組欄の時間を見るようになって、それを言いながら、うろうろするようになっていたのです。時間をテレビを「見ること」で把握するようになったということです。何回か経過するうちに、彼はそれまで視線を全然合わさなかったんですね。視線を合わすようになってきまし

た。それから、私の膝に、後ろ向きにちゃんと座るようになってきたんです。視線と視線が遠くから合ったので、私がふっと見返しますと、パッと目をつぶるということもありましたが、それも段々と慣れてきたんですね。その前に目が開いたり閉めたりする赤ちゃん人形を触っていました。こうして、目を見ることが大丈夫になってきた後、私の後ろにおんぶされてきたんですね。わたしは彼をおんぶしたまま鏡の前に行って、一緒に見ました。そうすると彼は、その自分がおんぶされた姿を絶対に見ようとしないうんです。首を反対に向けて、その鏡の姿を見ない。

これはどういうことだと思いますか。鏡の中に二人の姿が映っています。私の実際の姿も彼は見るすることができます。それと同じものが鏡に映っている。そして鏡に映っているその背中の中の自分、それはここにいる自分であるはずなんです。それと出会った時に、彼はその自分の姿をそういうものとして見るのですが、まだできない状態なんだなと、思われました。彼は見るということを通して、いろいろなことを調べようとしていたりしていた。先ほど申しましたように、テレビの画面をズーッと見ることに固執していましたから、さらにテレビの画面の中側を見たい、と思うようになったんでしょうね。テレビ局へ親に連れて行ってほしいと言って、テレビ局まで見に行行った。そのテレビの画面の中を見たいというのは、人間でいえば、人間の内側の心を見たいという気持ちが生じてきたと言えるのではないのでしょうか。

もう一つ、アスペルガー障害と思われる子どもさんの例を申します。この場合も、見る遊びが同じように起こってきます。彼は、単に並べるだけじゃなくて、たとえばプラレールをつないで、そこに電車も走らせる。駅も置くというように、イメージがあるような遊びです。この点が、カナーの自閉症と異なる点です。イメージがある遊びですから、先程

の子どもさんのようにただ並べるといようなことだけではないんですが、彼は、他の子がやってきてそれをちょっと触ろうとすると、もうそれは受け入れなくて、プラレール全部をブワッとパニック状態で潰してしまう。人の介入を許すことができない。彼においても、自分が思い描いているパターンを再現することが求められていた、と言えます。彼は、通って来る途中の電車の駅名を全部覚えだして、その後、世界地図をお母さんに開いてもらって、世界の土地の名前をお母さんに言ってもらおうということをしだしました。まさにこの世界を「見ること」によって把握しようと、しているということがわかります。この子ども、言葉も単に一語文ではなくて、もう十分話ができるようになったり、日常生活も困ることもなくなったときでさえも、電車の中で隣のおじさんの横に座って、窓の外を見ていた後、椅子から降りようとしたときに、隣のおじさんの足をグッとつかんで降りて、隣のおじさんにオッ何やという感じで見られても、全然気にしない、自分が人の足を触っているということさえ、認識が不十分であるということがあって、お母さんもびっくりされました。人の足ですから、外から見るとはできるけれども、内側で人間がいろんなことを感じているということが分かるのは、なかなか難しい、というのがこの子たちの困難さです。

この困難の軽減への重要な契機を開くのが、私が鏡像遊びと呼ばせていただいている段階です。これが第2段階です。プレイセラピーをやっていると、こういう遊びを子どもは創りだしていきます。たとえば、4歳の男の子です。この子ども来たときはかなり重症の自閉症でした。手をヒラヒラさせながら、小さな紙の一片を振り回しながら走り回っている子どもでした。彼はプレイルームに入ると、電車を持って、目の前で左右に動かしながら走り回っていた。そのうち、電車を持ちなが

ら滑り台を滑るようになりました。毎週一回一時間ずーっとお会いしてるんですが、そういうふうに滑るようになったんですね。そして私も、彼の後から「滑るよー」と言いながら、脅かさないように滑りました。あるとき、私の方をパッと見るようになったんですね。また彼が滑る、で、私が後ろから滑ると、彼は自分から、もっと滑れというふうに、私に要求するようになりました。こういう子どもたちは、自分から要求するということはほとんどないので、この子の場合も初めての要求でしたから、私はそれに応じて、何回も何回も滑ったんですね。彼は、私が滑るのを後ろ向いて見たり、目の端の方で見たりとかいうようなことをしてしまっていて、まったく人間を見てるような目ではないんです。電車を見るような、電車が走っているのを見ているのと同じような見方で見ているんですね。

これからずっと展開していくんですけども、時間がありませんので飛ばしまして、簡略化して申しますと、10ヶ月ぐらい経ったときに、次のような遊びを彼から創りだしました。このときはグループでやっていたんですけども、もう1人のセラピストの手を引っ張って、滑らせて、私にはこっちの方に座ってろって座らせておいてですね、私の横に彼は座って、2人でそのセラピストが滑り台を滑るのを見るんですね。私はその人を見る、彼も見ると。2人でもう1人のセラピストを見た後、顔をあわせてニコツとして、私の顔を見るんですね。

共同注視っていうのが、発達心理学では大事にされてますけど、まさしくそれです。ひとつのことを一緒に見て、そして、それを共有するということが彼が動作で提案して、それを繰り返したんですね。これを、彼自身が自分から創りだしていくということは、本当に大事なことだと思います。私たちは、訓練として教えてるんじゃないです。共同注視は

重要だから、こういう場面をこちらが設定してやるというんじゃなくて、彼の方からそういう遊びを創りだしてきて、私に手伝わせた。私は、彼の提案にすぐに応じて動く。自閉症のセラピーでは、こちらも、それだけ敏感に彼の行動を察知することが、必要になるんです。それに応じていくということです。

も一つ大事なのはですね、彼はそのとき私を横に座らせ、まず、キュッと私に抱きついて、その後グルーと座ってる私の周りを一周して、耳を見、顔を見、体全身を見てまわったんですね。赤ん坊がお母さんの顔を見るのと同じように見たんですね。そういう感じで、彼は私の全身を見ました。彼は、最初は電車を持っていました。この電車を他の子に取られると、もうパニックに陥っていたんですが、この時期になると、電車ではなくて自分に他の子が近づいてくるとパニックになって、すぐセラピストのところにとんでくるようになりました。ですから、他のところで遊んでいても、他の子が近づくなと思うと、パーッと私のところにとんでくる。遠くから声を出して、まだ言葉になりません、声を出して、アーンとか言いながら、「滑り台を滑るよ」ということでしょうか。私に、見てくれというように、要求する。今までは、いわば電車が彼自身であった。電車に彼は同一化していた。人間である私に同一化する中で、彼自身という存在が現れ出てきた、彼は私という存在を見ることによって、そこに自分を見るようになっていった、と考えられます。そういうときです。他の子が、彼にとってとても怖い状態になったときに、私のところに来てきて、私の口を触るんですね。そして「Aくん、Aくん」って、彼は言ったんですね。その前に一回、うろうろしてるときに「Aくん」っていうのが聞こえてきて、彼はそんな言葉はまだ言えないはずなのになと思ってたときがあったんですが、そのとき私の口を触って、彼は「Aくん、Aくん」っ

て言ったんですね。「Aくん」っていう言い方は、私が彼に呼びかけていた言葉です。お母さんは「A」って呼び捨てにされてたんですね。「Aくん」っていうのは、私と彼との間の彼への呼びかけの言葉だったんですが、「Aくん」って、彼は言った。そして、私が「Aくん」って呼ぶとですね、彼は納得する。私の口からの呼びかけにおいて、「Aくん」っていう存在があり、私という体を通して「Aくん」という存在を見ている、ということがよくわかるプロセスでした。このように彼の自己は、セラピストという私において、それを鏡として、その呼びかけにおいて見出されていった、と言えるように思います。

さらに、そういう遊びの中から、第3段階として、象徴的な表現が出てくる遊びをご紹介します。先に申しました鏡像遊びを通して、セラピストという他者をそこに入れ込んで、自分というものを見出していく遊びがなされると、その次の第3段階では、彼自身あるいは彼女自身の内的な世界を創りだしていくような、象徴的な遊びが生まれてきます。そこには、生まれ出る遊びだとか、家族の関係の遊びだとか、いろんな遊びが生まれてきます。同時に、言葉も生まれてきます。

こういうふうにセラピストを自由に使って、最初の例では、彼が持っていた電車のように、セラピストを自由に、安心して使うことによって、他者という存在を見だし、そこに他者を発見し、他者と出会い、そして、それによって自分という器を、身体イメージを通して創りだしていく。そういう身体イメージができてくることによって、象徴的な遊びが生まれてくる。

彼らの遊びはどのようにして象徴的な遊びになっていくかですが、それは、彼らが展開していく遊びに大事に付き添う人がいて、一対一で、彼らの遊びを守ってプレイセラピーをやっていると、彼らは確実に自分にとっ

て一番大事な遊び、発達的な課題としても一番大事な遊びを自ら見いだしていく、と私は考えています。

神経症レベルの子どもたちは、はじめから象徴的な遊びをしますが、自閉的な子どもは、まずセラピストとの関係をつくるために、セラピストが関わりに十分な力を注がないといけませんので、長期の時間を要します。それを通りますと、原初的な不安が出てくる。こういう子どもたちは、当初は他の子たちを何とも思わないように走り回っていますが、先ほどの例で申しましたように、他の子が近づいて来るだけで、怖がってセラピストに守るように求めてくるようになる。真っ裸で赤ん坊が放り出されたような状態を示します。そういう状態を経て、もう一度、改めて自分というものを、自分の器を作り直して、そこから象徴的な遊びが生まれてくる、というプロセスを経ることが、子どものプレイセラピーを通して、私たちは教えられます。

原初的な不安をとともにかかえる場を得ますと、自らの生に欠くべからざる重要な遊びを、そこで創り出していく。子どもの方がそういうふうに変わってきますと、お母さんとの関係も変わってきます。お母さんに、もっと子どもにこう関わってくださいよ、子どもとの関係を良くしてくださいよって言いますと、お母さんも辛いのです。日常の生活の中では、ときにはお母さんは子どもを放ったらかしにして、家事をしなければいけないこともあるります。しかし、プレイセラピーという場では、その時間は本当に集中して子どもとの関係を大事にする。それを毎週毎週続けるということを通して、子どもとセラピストの関係が母子関係に移っていく。お母さんとの関係も、子どもの方が変えていく。お母さんたちは、子どもが私の方を見てくれるようになった、私によく求めてくるようになったので親になることができた、と言われることがあります。まずは子どもの力を信じて、子ど

も自身から生まれてくる遊びを信じて、心理臨床的なアプローチがなされていく、ということをお話しさせていただきました。

ご静聴ありがとうございました。（拍手）
（了）

（注）

上記は、2009年11月21日（土）に、追手門学院大学において開催された、地域支援心理研究センター公開シンポジウム「発達障害の理解と支援—心理臨床的アプローチから—」の基調講演を基に作成した。